

暮らしやすい中野を目指して

中野LGBTネットワーク にじいろ

○同性パートナーシップ条例等の
流れを受け設立

6月のとある平日の夜、「中野LGBTネットワークにじいろ（中野にじねっと）」の3名の共同代表にお話しを伺った。場所は、中野にある「LOUD」というセクシユアルマイノリティのためのコミュニティスペースである。おのおのがそれぞれの仕事を持っているため、平日に3名が集まることのできる時間帯は、どうしても夜になってしまう。

「例えば、中野駅からLOUDまでの道すがらだけでも、我々と同じセクシユアルマイノリティ（LGBT）の人とすれ違うことがよくあります。そうだと、我々には感覚的にわかるんです」と共同代表の大江千束^{ちづか}さんは言う。言い換えれば、その感覚がなく、普段はセクシユアルマイノリティの存在に気づいていない中野区在住・在勤・在学の非当事者の人々に、自分たちセクシユアルマイノリティの存在を知ってもらい、つながり、よりよい地域社会をみんなで築きあげていくこと——それが、中野にじねっとの活動

ということになる。

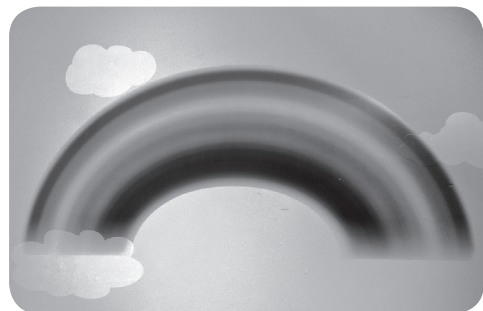
中野にじねっとは、「条例」で同性カップルに「パートナーシップ証明書」を交付することにした渋谷区や、「要綱」で同性カップルにパートナーシップ宣誓書受領証を交付することにした世田谷区の流れを受け、中野区内に当事者のネットワーク組織が立ち上げれば、区に要望を届けられるのではないかという思いの中、2015年の10月1日に設立された。10月29日には、中野区との共催で、「すべての人々が暮らしやすい中野区をめざして」と題し、セクシユアルマイノリティへの理解促進のためのシンポジウムを開催。区長や教育長といった行政関係者や弁護士・医師らの専門家、当事者らが登壇し、150名を超える来場者とともに、熱気あふれる意見交換が行われた。ちなみに、中野区が策定した「新しい中野をつくる10か年計画（第3次）」（平成28年度から平成37年度まで）には、人権意識の向上や多様な人の参画推進の一つの例として、「LGBT」という文言が入ることになったという。

○中野で実施した、
住まいに関するアンケート

中野の地域性について伺ったところ、「統計的な数字はないですが、新宿二丁

目からのアクセスの良さもあって、セクシユアルマイノリティがたくさん住んでいることで知られている」のだとか。そして、例えば、お笑い芸人が多く住んでいたりと、廃校になった学校の校舎が今では毎週末、コスプレ撮影会が実施される場所になっていたり、あるいは、美術の専門教育を受けていない人々による芸術作品（アール・ブリュット）の展示が商店街や街なかのスペースで行われていたり、もともと、中野には多様性を受け入れる土壌があり、だからこそ、行政の理解も進んでいるのかもしれない。

とはいうものの、実際に暮らしていくとなると、まだまだ課題はたくさんある。中でも、「住まい」という、暮らしにとつて重要な項目もその一つである。例えば、「マンションを同性カップルで借りる場合、ルームシェアという形を取らざるをえなかったり、カップルだと分かると大家さんの許可が得られないといった状況もあります」と大江さん。こういった状況に対し、中野にじねっとでは、この春、当事者の住宅事情に関するアンケートを行い、その結果をもとに、「LGBT×住まい〜LGBTが中野に住む」と題したシンポジウムを行った（5月4日）。そして今後は、区内の不動産業者などに、LGBTへの配慮を求めるよう働きかけていき、その上で、例えば、「LGBT



(上)左から:大江千束さん、山縣真矢さん、永野靖さん。
(左上)LOUDで販売されていた虹色のアクセサリ。
(左)壁に貼られた虹のイラスト。

フレンドリー」なお店には、それを示すレインボーのシールを貼ってもらうなどといったアイデアも出ているという。

○地域での活動とつながりはなぜ大切なのか？

「地域に仲間がいたほうが、何かあったときに心強い」と共同代表の山縣真矢さんは言う。もともと地域での活動にさほど興味を持っていたわけではないが、当事者の区議会議員が誕生したことがきっかけとなり、また、渋谷区や世田谷区といった他の自治体での動きにも触発され、中野にじねっとの設立を呼びかけた。まずは区内の当事者がつながり、課題を共有していくこと。その上で、行政や地域社会に働きかけていく。そういった地域に根ざした活動を通して、当事者同士の互助も培われていくし、寛容で暮らしやすい地域社会が醸成されていくのではないかという。

共同代表の永野靖さんは、老後のことを心配する。「今はまだいいが、年をとって、介護が必要となり、一人で暮らしていた場合、急病になったり、地震・火事が起こった場合、どうなるんだろうという不安があります。そのためにも、人と人のネットワークがあると安心できます」ということであつた。

当事者だけではなく、周りで関わる人にとつても、セクシュアルマイノリティに対する理解は暮らしやすい地域社会にとって大切である。地域のセクシュアルマイノリティが声を上げることで、地域の人々も地域課題に気づき、暮らしやすい街にしていこうための動きが起こってくるからである。最近では、当事者ではない人がLGBT啓発に関する活動に関わることも、若い世代を中心として増えてきているという。支援者を増やしていくためにも、子どもころからのLGBTに関する教育は大切であり、そこについても行政や教育委員会に訴えていきたいということであつた。

「私たちセクシュアルマイノリティが暮らしやすい街というのは、みんなにとつても暮らしやすい街だと思います。たくさんの方にセクシュアルマイノリティというのを知り、考えてもらいたい。これからも、人と人とのつながりながら、暮らしやすい中野のために活動していきたいと思っています」。

3名の共通の思いに、地域での活動の息吹と、今よりも住みやすい中野の将来を感じた取材であつた。



(右) 共同代表の竹内清文さん。

(左) 地域の子育て中のお母さんと、話し合い、自分たちのことを知ってもらうことも。左から3人目が同じく共同代表の「のりくん」。



自己肯定感を高める場づくり

すぎせく

杉並・性的マイノリティ共生の会

すぎせくは、2015年の夏に発足した杉並区を中心に主にLGBTsによるLGBTsのためのワークショップを実施している団体である。

結成当初は、自分たちのことを知ってもらうために、行政や教育委員会に話にいたり、市民向けの講座で、「セクシュアルマイノリティやLGBTsとは何か？」といったことを自らの体験談とともに話したりしたという。

そして、今年度から民間の助成金ももらえるようになり、活動の一つであったワークショップの回数を増やし、杉並区内で毎月1回、近隣区で2ヶ月に1回実施するようになった。毎回20代〜40代を中心に10名ぐらいの参加があり、東京都外からの参加もあるという。

ワークショップはセクシャルマイノリティの当事者の方が安心して参加できるように、当事者のみ参加という配慮が成されている。共同代表の竹内さんらが、開発教育のワークショップの手法をベースに、安心してなんでも気軽に話せる場を作った上で、「LGBTs」として体験したこんな気持ち」や「男らしさ・女らしさって？」といった毎回異なるテーマに関してグループワークや話し合いを行っている。出された意見を否定したり、優劣を競い合ったりするのではなく、違いや多様性を認め合う場になるように努めているという。

「違いや多様性をワークショップを通じて実感し、周りと異なることが変ではないと思うことで、自己肯定感を高めていくことが大切だと思っています。自身を肯定し認めることによって、周りの多様性も認めることができる。そのような人が増えれば、社会も変わると思っています」と竹内さんは話す。

参加者からは、「人見知りで話ベタであるが、すぎせくの場だとすごく話しやすい」、「同じLGBTsの立場でも、意見が人によって違う。違うことっておもしろい」といった感想が寄せられているという。また、竹内さんと一緒にお話しを伺ったメンバーの方からは、「地元にも場があることで、何かのときに声を掛けあえる関係やつながりが身近なところにできてよかった」といった声もあった。これからも参加者一人ひとりに寄り添った、すぎせくの地域での活動を見守っていききたいと思う。



(左) 左から、古川亮介さんと七崎良輔さん。

(右) 参加者全員で話し合うワークショップの様子(江戸川)。



江戸川区に根ざして暮らす

LGBTコミュニティ江戸川

平日の夜、東西線西葛西駅で待っていると、一組のカップルがこちらに歩いてきた。仲睦まじい雰囲気の中、古川亮介さんと七崎良輔さんが活動している団体が、LGBTコミュニティ江戸川である。

団体は、2015年2月に、渋谷区でのパートナーシップ条例の動きがきっかけとなり、江戸川区をセクシュアルマイノリティの人たちにも住みやすい街にしていくため立ち上がった。

行政や区議会議員に陳情に行ったり、区内の専門学校から依頼を受け、授業の一環としてセクシュアルマイノリティについて話したりしている。

また、誰でも参加可能なセクシュアルマイノリティについて考えるワークショップを定期的に行う。時には60人を超える参加者全員で話し合いを行う。そして、参加者の半分を占めることが多い非当事者に対して、当事者の生の声を届ける貴重な場にもなっているという。

「非当事者の方は、セクシュアルマイノリティについて食わず嫌いになっていて誤解をしている面もあるのでないかと思っています。ワークショップや講演の場を通して、積極的に話していきたい

と思っています」と古川さんは言った。

また、「セクシュアルマイノリティは、隠れて生きている人も多いと思います。私は江戸川区の地元が好きで、そこで普通に暮らしたいと思います、近所の人とも積極的に交流しています」と七崎さん。近所付き合いは良好で、2人の関係について近所で知らない人はいなく、時には近所の子どもと遊んだり預かったりすることもあるという。「そのような環境があるので、江戸川を離れる気が全くないんです」と古川さんも同調する。

古川さんと七崎さんは、江戸川区で他のセクシュアルマイノリティの先陣になるようにと、団体活動や2人の生活をするようにと、積極的に発信。本年10月には、中央区にある大きな寺で、2人を祝うセレモニーも行う予定だという。

「もつと周りの人にセクシュアルマイノリティを知ってもらいたいと思います。理想を言えば、セミナーや勉強会、講演会ではなく、例えば、近所付き合いや、地域のお祭りといった日常の一言の中で、当たり前のようにセクシュアルマイノリティも含むさまざまな立場や世代の人が交流しているような地域になるように、これからの活動をしていきたいと思っています。」2人は力強くそう語ってくれた。